

## 根津・千駄木界隈を歩く

東京メトロ千代田線 根津駅 2番出口前 集合 JR西日暮里駅で解散予定 約■4.4■km

**1. 東京メトロ千代田線 根津駅** 1969（昭和44）、営団地下鉄千代田線の北千住～大手町の開業と同時に開業。

**不忍通り** 道路の開設は1922（大正11）。目白台2丁目から護国寺前、千駄木、根津を経て、上野公園前交差点付近まで。

**2. はん亭（串揚げ）** 1917（大正6）完成。木造3F、瓦葺寄棟屋根の店舗。ほぼ同面積、同高の階を三層に重ね、高さがある。

もとは下駄の爪先に付けて雨や泥をよける爪革を売っていた店。その後、運送会社の社員寮となっていたが、昭和50年代に串揚げ屋となった。不忍通り側は「富貴堂」という茶道具・漆器の販売店だった建物。2000年頃に不忍通りの拡張により除却されそうになった時、半分を削って残し、はん亭と一続きに改築された。削った部分に鉄の矢来を立てモダンな趣にしている。

また両者の間には土蔵もあり、いずれも客席となっている。国登録文化財

**3. 根津2丁目** はん亭のある裏通りには、木造モルタル看板建築などが建ち並ぶ。

**4. 弥生坂（鉄砲坂）** かつてこの一帯が「向ヶ岡弥生町」だったことに因む。江戸期には水戸藩の屋敷（現東大農学部、地震研究所）や、小笠原信濃守の屋敷があり、南隣は加賀藩前田家の屋敷（現東大）だった。明治になると、これらは明治新政府のものとなり大学用地とされ、周辺の町は向ヶ岡弥生町と名づけられた。1894～95（明治27～28）頃に坂は造られ、町名から弥生坂と呼ばれるようになった。坂下に幕府鉄砲組の射撃場があったので鉄砲坂とも呼ばれた。

射的場の移転後は本格的な宅地化が行われ、言問通りが延長されて1894（明治27）頃には新たな坂が開かれ、この坂は地名をとって「弥生坂」と名づけられた。

**言問通り**（ことといどおり） 本郷通りの本郷弥生交差点から、隅田川の言問橋に至る。橋名は平安時代の六歌仙のひとり在原業平の歌に由来する。業平は人気歌人だったが、不祥事が原因で都を離れ、当時湿地帯が広がる辺境だったこの地に左遷された。はるばる隅田川の畔までやってきた時、鳥の名に託して都の恋人を偲んだという伊勢物語の故事から、言問の字を採ったという。「名にしおはばいざ言問はむ都鳥わが思う人はありやなしやと」

**5. 東京大学本郷キャンパス・浅野地区** 浅野地区という名称は、1887（明治20）に本郷区向ヶ岡弥生町に移転してきた浅野侯爵邸敷地の大部分が、戦中から戦後にかけて大学敷地になったことに由来する。同キャンパス内で弥生式土器が発見されたことから、弥生式土器発掘ゆかりの地の碑、弥生二丁目遺跡遺跡解説板、向ヶ岡碑などがキャンパス内に建てられている。キャンパスは工学部や理学部が利用しており、原子力工学関連の研究施設が多い。

**6. 東京共同射的会社 射的場跡** 同所は江戸期には水戸藩の中屋敷の一部。同中屋敷は、1869（明治2）に新政府により東京帝国大学（現 東京大学）のための用地として公収されたが、その一部に警視局（現 警視庁）の射的場（射撃練習場）として建設が始められ、1877（明治10）に開場。1882（明治15）に宮内省所轄となり、東京共同射的會社（協会）が設立され、皇宮地附属地の東京共同射的會社射的場となった。以降、度々明治天皇の行幸があり、陸軍や警視庁、上流階級の者などによる射的会が行われていた。1888（明治21）に会社と射的場は大森（現 大田区山王2-24近辺）に移転、日本帝國小銃射的協会となった。なお大森射的場は周囲の宅地化が進んだため、1937（昭和12）に鶴見の東寺尾に移転（その後、現在の状況については未把握）。

**7. 異人坂** 明治時代、坂上の地に東京大学のお雇い外国人教師の官舎があり、ここに住む外国人がこの坂を歩いて不忍池や上野公園を散策した。当時は外国人が珍しかったこともあって、異人坂と呼ばれるようになった。

『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』p.078-079

**旧弘田家住宅主屋** 1931（昭和6）竣工。主屋、門柱・塀が国登録有形文化財

**8. おぼけ階段** 上りと下りで段数が異なるという都市伝説、またはおぼけが出そうな雰囲気から。

39段（下から32・7段） 幅1.7～4.0m（下24段は幅広、上15段は狭い） 高低差約5m 長さ約14m

蹴上13cm 踏み面36cm 傾斜20° 『東京の階段』p.110

2004～05に南側が拡幅されて下部の幅が3.1mになり、2007～09には北側が拡幅されて最大幅が4mになった。

**9. 日本基督教団 根津教会** 1919 (大正8) 竣工、木造平屋・切妻・下見板張、瓦一部金属板葺  
北西角に玄関、北東角に聖壇を置き平面形は非対称。門と塀も含めて、国登録有形文化財

**10. 表具武田・武田邸** 出桁造り店舗

**根津遊郭跡** 江戸期に根津神社の門前に成立した岡場所が、明治になると遊郭として認可された。しかし近くの本郷に1876 (明治9) に東京医学校が移転し、更にこれが1888 (明治21) に東京帝国大学となることになったため、風紀を乱すという理由で、同年、根津遊郭は洲崎に移転させられ、無くなった。

**11. 新坂・権現坂・S坂** 本郷通りから根津谷への便を考えて造られた新しい坂のため、新坂と呼ばれた。また根津権現 (根津神社の旧称) の表門に下る坂なので権現坂ともいわれる。森鷗外の小説「青年」 (明治43) に、「地図では知れないが、割合に幅の広い此坂はSの字をぞんざいに書いたように屈曲してついている。」という文があり、旧制第一高等学校の生徒たちが、この小説を読み、好んでこの坂をS坂と呼んだ。『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』p.081

**12. 根津神社 (根津権現)** 日本武尊が1900年近く前に千駄木に創祀したと伝えられる古社。文明年間 (1469-86) には太田道灌が社殿が造営されたが、江戸期の万治年間 (1658-61) に同所が太田氏の屋敷地となったため移転され、更に団子坂上 (現 文京区立本郷図書館周辺) の元根津に遷座された。現在地はもとは、五代将軍綱吉の兄 綱重 (家光の三男 (次男とも)) が初代だった甲府藩の山手屋敷 (別邸) で、綱重の長男 綱豊 (後の六代将軍家宣 (いえのぶ)) は、1662 (寛文2) にここで生まれた。五代将軍徳川綱吉が1705 (宝永2) に綱豊を世継ぎとしたとき、綱豊はこの藩邸を閉じて幕府に献納。産土神を元根津から現在地に遷座し、現在の社殿が1706 (宝永3) に完成した。形式は権現造で、規模が大きく華麗。本殿、幣殿、拝殿、西門、唐門、楼門、透塀は国重要文化財。東京十社の一つで、ツツジの名所としても知られる。瓦などに記されている卍は、仏教における吉祥の印。神仏分離で多くの神社では廃されたが、文化財となったこともあり往時のデザインを残しているという。

**徳川家宣 胞衣塚** (えなづか) 六代将軍家宣の胞衣を埋めたところと伝えられる。胞衣は、胎児を包む膜と胎盤のこと。

**駒込稻荷** 旧甲府藩邸時代に守り神として祀られたもので、本殿の遷座に伴って境内社となった。

**乙女稻荷** 根津神社の遷座時に、境内西側の傾斜面 (つつじが岡) の中腹に洞を穿つ形で祀られたもの。祭神の倉稲魂命 (ウカノミタマノミコト) が女性の神様であることと、この洞穴を女性に見立てたことが「乙女」の由来。

**乙女稻荷神社への階段** 16段 (下から5・4・5・2段) **境内社・駒込稻荷参道** 25段 (下から16・2・2・1・4段)

**権現** 日本の神々は、仏教の仏や菩薩が仮の姿で現れたものとする本地垂迹 (ほんじすいじゃく) 思想による神号。「権」は「臨時の」「仮の」という意味で、仏が「仮に」神の形を取って「現れた」ことを示す。**根津権現** (ねづごんげん) は、本地仏の十一面観音菩薩が、スサノオの形で現れたもの。相殿に祀られた山王権現 (大山咋神 (おおやまくいのかみ)) と八幡神 (菅田別命 (ほんだわけのみこと) ・応神天皇) と合わせて、根津三所権現とも呼ばれた。

**13. 弥生正縁館** 1906 (明治39) 竣工。旧渋谷鉦吉邸洋館、国登録有形文化財。日本橋に店を構える毛織雑貨輸出商の居宅。崖地に沿った不整形な形で、2階には張り出しがある。外装等は改装されているが、部分的に昔の様式を残している。

**14. 東京大学野球場** 東京大学弥生キャンパス内。RC・3Fの観覧席には片持ち支持のアーチ形屋根が架かる。グラウンドを囲むフェンスを含め、全体がRC。1937 (昭和12) 竣工。国登録有形文化財

**15. 根津裏門坂** 根津神社の裏門前を、根津の谷から本郷通りに上る坂道。

**16. 日本医科大学前の階段** 11段 急なスロープ部分に視覚障がい者用点字ブロックが張られている。

**17. 日本医科大学・付属病院**

1876 (明治9) 長谷川泰により、西洋医学による医師養成学校「済生学舎」が設立される。

1904 (明治37) 私立日本医学校が設立され、旧済生学舎を引き継ぐ。

1910 (明治43) 千駄木の付属病院開設。

1926 (大正15) 日本医科大学に昇格

- 18. 森鷗外・夏目漱石旧居(猫の家)跡** 1887(明治20)頃、医学士中島襄吉の新居として建てられたが、空家になっていたのを、1890(明治23)に森鷗外が借り、一年余りを過ごした。鷗外はこの後、観潮楼に越した。また1903~06(明治36~39)にはイギリスから帰国した夏目漱石が住み「我輩は猫である」をここで書いた。建物は1963~64(昭和38~39)に「博物館明治村(犬山市)」に移築された。
- 19. 解剖坂(かいぼうざか)** 日本医科大学と同大学図書館の間にある坂。以前は27段だったが、数年前に最下部の1段がアスファルトで埋められ26段になった。上部も昔は階段(20段)だったようだが、現在は蹴上げ部分がモルタルで埋められている。26段 幅3.5~4.4m 高低差約7m 長さ約50m 蹴上12cm 踏み面平均82cm 傾斜8° 『東京の階段』p.57
- 20. 千駄木ふれあいの杜公園** 江戸時代、日本医科大学から世尊院あたりまでの広大な敷地は、太田道灌の子孫である太田摂津守の下屋敷だった。明治に入ると屋敷は縮小したが、かつての屋敷跡は「太田の原」と呼ばれ、太田ヶ池という池もあり、周囲に田園風景が広がる風光明媚な場所だったという。大正・昭和期になると不忍通りに市電が開通し、市街化が進み、池も周囲の田畑もほとんど無くなった。屋敷内に連なっていた崖地の緑もここだけになったが、「今に残る貴重な自然を残したい」という所有者の意向で、文京区役所との間に「市民緑地契約」が結ばれ一般公開された。現在は文京区の所有となり、緑地公園にされている。
- 21. へび階段** 34段(下から21・13段) 幅1.4~2.1m(下19段は幅広、上15段は狭い) 高低差約9m 長さ約21m 蹴上22~26cm 踏み面41~64cm 傾斜22~35° 『東京の階段』p.130 地元では「千駄木のおぼけ階段」とも呼ばれている。
- 22. だんだん坂** 40段 幅2.1~2.6m 高低差約5m 長さ25m 蹴上10cm 踏み面61cm 傾斜約9° 『東京の階段』p.56
- 23. 藪下通り 汐見坂** 茂みの石垣の上に石の標識がある。汐見坂は都内に数ヶ所あり、海が見えることが由来となっている。近辺に「観潮楼」があることからこの汐見坂も東京湾を望むことができたことから付けられた名だと考えられる。
- 24. 文京区立森鷗外記念館(観潮楼・鷗外邸跡)** 森鷗外が1892(明治25)から1922(大正11)に60才で亡くなるまで30年間住み、「青年」「雁」「高瀬舟」などを著した住居跡。鷗外の父静男が、千住で開業していた医院をたたんで、息子と共に住もうと家を探し、眺望の良い家としてここを選んだ。当時、鷗外は同じ千駄木町の57番地に住んでいたが、父の勧めを受けて引っ越し、2階の書斎から東京湾品川沖の船が望めたのでここを観潮楼と名付けた。観潮楼は、鷗外の没後しばらくは家族が暮らし、その後は借家となっていた。
- 1937(昭和12) 借家人の失火により母屋の大部分が焼失。
  - 1945(昭和20) 戦災により、胸像、銀杏の木、門の敷石、三人冗語の石以外の全てが焼失。
  - 1962(昭和37) 生誕100年を記念して鷗外記念室を併設した区立鷗外記念本郷図書館(設計:谷口吉郎)が開館。
  - 2006(平成18) 図書館が現本郷図書館に移転。記念室は独立して「本郷図書館鷗外記念室」となった。
  - 2008(平成20) 遺品資料の保存環境改善のため、改築が決まり、鷗外記念室は休室。庭園のみの公開となる。
  - 2012(平成24) 文京区立森鷗外記念館 開館。
- 25. しるへび坂** 38段(下から8・10・20段) 幅2.7~3.3m 高低差約7m 長さ約44m 蹴上12~20cm 踏み面30~32cm 不忍通り沿いに建つマンションの間に東京スカイツリーが見えている。「文の京都市景観賞」受章、2019
- 26. 団子坂** 別名:潮見坂、千駄木坂、七面坂。坂名の由来は、坂近く団子屋があったともいい、悪路のため転ぶと団子になるからともいわれる。また御府内備考には七面堂が坂下にあるとの記事があり、ここから「七面坂」の名が生まれた。「潮見坂」は坂上から東京湾の入江が望みできたためと伝えられている。幕末から明治末にかけては菊人形の小屋が並んだ。またこの坂上には森鷗外、夏目漱石、高村光太郎が居住していた。 『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』 p.080
- 27. 島藪邸** 1932(昭和7)竣工。東京帝大医学部教授の住宅。設計:矢部又吉。国登録有形文化財 島藪邸の前の通りは、戦前は銀行の頭取が多く住み、銀行通りともいわれたという。周辺には曾瀬中條建築事務所の中條邸(宮本百合子の実家)、高村光太郎邸もあった。島藪邸の塀は中條邸入口門の名残りだという。

- 28. 山脇邸・睡庵** 1924（大正13）竣工。裏千家の茶人、山脇善五郎の住宅。築地の家が関東大震災で被災したため、震災直後にここに建てられた。
- 29. 栗橋邸** 比較的大きな総2階の木造住宅。
- 30. 芦葉邸 倉庫・門** 昭和初期に土蔵に代わり普及したRC造の倉庫（RC・2F）と門（石造、鉄製門扉付）。門柱は小松石瘤出し仕上げで、装飾的な門扉が付く。倉庫・門共に1934（昭和9）完成。設計：小島栄吉。国登録有形文化財
- 31. 旧安田楠雄邸** 1918～19（大正7～8）竣工 東京都指定名勝。  
 1918（大正7） 豊島園の開園者として知られる藤田好三郎がこの地を取得し、翌年邸宅を建設。  
 1923（大正12） 安田財閥の創始者安田善次郎の娘婿善四郎が購入し、1937（昭和12）に長男楠雄が相続。  
 1995（平成7） 楠雄氏他界の後、遺族から財団法人日本ナショナルトラストに寄贈される。  
 2007（平成19） 歴史的建造物として修復管理され、毎週2回公開されるようになる。  
 2018（平成30） 耐震補強等のため8月から2019年まで休館。  
 伝統的な和風建築の書院造や数寄屋造を継承しながら、内部に洋風の応接間を設けるなど、和洋折衷のスタイルも取り入れた造り。【公開日時】 水曜日・土曜日の10時30分～16時（入館は15時まで）【維持修復協力金】 大人：500円
- 32. 須藤公園** 加賀藩の支藩の大聖寺藩（十万石）の屋敷跡。その後、長州出身の政治家品川弥二郎の邸宅となり、1889（明治22）に実業家須藤吉左衛門が買い取った。1933（昭和8）に須藤家が公園用地として東京市に寄付、更に1950（昭和25）に文京区に移管された。高低差のある台地と低地を生かした公園斜面地には、クスノキなどの大木が残る。もともと湧水を利用した滝があったが、近年は水が枯れていたため、地元の要望を受け、2003（平成15）に池の水を循環ポンプでくみ上げて流すよう整備され、公募をもとに「須藤の滝」と命名された。滝の高さは約10m。中の島の弁天堂は地元が維持・管理している。  
**公園内の階段** 北西側入口 カーブ 26段 上段広場～須藤の滝 S字 20段 須藤の滝～弁財天の橋詰 直 8段  
 上段広場～弁財天の橋詰 蛇行 25段 上段広場～トイレ前 カーブ 34段 北東側入口 く字 8段（下から1・7段）
- 33. アトリエ坂** 以前、坂の途中に「アトリエ千駄木」という美術教室があったことから。  
**講談社創業の地** 1909（明治42）にここで創業。
- 34. 大給坂**（おぎゅうざか） 坂名は明治初期から昭和初期まで、坂上（現在の千駄木3-12付近）に大給子爵家や屋敷を構えていたことにちなむ。一部の坂道本には、江戸時代に大給氏の屋敷があったと記されているがこれは誤り。大給氏は戦国時代に三河国東賀茂郡大給（現在の愛知県北東部）を本拠とした豪族で、早くから徳川家康に仕え、1764（明和元）に三河西尾に移封された。江戸期には松平氏を名乗り、大分県大分市の豊後府内藩の藩主だった。大給邸は、昭和初期に鈴木三樹之助（三木証券創立者）に売却された後、大平正芳（鈴木の娘・志げ子の夫）邸となった。『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』p.082
- 35. 半床庵**（武者小路千家東京出張所内） 久田宗全の好みで、その次男久田宗也によって江戸時代中期（1705頃～44（宝永2頃～寛保4））に建てられ、1921（大正10）に現在の地に移築された。東京都指定有形文化財。
- 36. 狸坂** 旧千駄木林町であるこの界限は、昔は千駄木山といって雑木林が多かったが、界限では毎夜どこからともなく「里ばやし」が聞こえたという。土地の人々はこれを千駄木山の「天狗ばやし」「馬鹿ばやし」といって、ここにすむ狸の仕業といひ伝えてきた。このため坂上の一帯は狸山といわれ、そこに上るこの坂は狸坂と名づけられた。
- 37. きつね坂** 名称由来の詳細は不明。恐らく、狐が出る、狐に化かされるといった類のことが由来だと思われる。
- 38. よみせ通り・愛染川跡** 染井霊園付近の池を水源とする谷田川の下流部。1923（大正12）に暗渠化されてよみせ通り（幅8m）やへび道となった。**延命地藏尊**のあるよみせ通りは、以前は商店が連なり安八百屋横丁などと呼ばれた。
- 39. 谷中銀座** 昭和のはじめには日暮里駅の近道として、幅2mほどの道に店が10軒ほど並んでいたという。戦後、現在の幅に拡張され、約70軒の店が並ぶ。数ある〇〇銀座の中でも、観光客などが多く賑やかな商店街として知られる。

**40. タヤけだんだん** 西向きに下る階段で、坂上から眺める夕焼けが美しいことから

36段 (18・18段) 幅4.4m 高低差4.0m 長さ15m 蹴上11cm 踏み面40cm 傾斜15° 『東京の階段』 p.144

**41. 七面坂** 七面の名は坂上の北側にある日蓮宗延命院の七面堂から。七面堂は甲斐国 (山梨県) 身延山久遠寺の西方、七面山から勧請した日蓮宗の守護神七面天女を祀る堂。

**42. 経王寺** 1655 (明暦元) 日蓮宗 この地の豪農が寺地を寄進し、堂宇を建立したことに始まるという。本堂隣の大黒堂には日蓮上人の作と伝えられる大黒天が祀られている。1868 (慶応4) の上野戦争のとき敗走した彰義隊士をかくまったため、新政府軍の攻撃をうけ、山門には今も銃弾の痕が残っている。

**43. 御殿坂** 寛永 (1624~44) の頃、白山御殿 (将軍綱吉の御殿) や小菅御殿 (将軍御膳所) と同様の御殿がこのあたりにあったことにより付いたというが、坂名の由来は明確ではない。この坂に続くJR跨線橋は下御隠殿坂橋という名。同時期にできた御隠殿坂橋と対をなし、御殿から離れていることから下が冠されたという。現在の橋は1995 (平成7) 架橋。

#### **44. 日暮里駅**

1905 (明治38) 日本鉄道の三河島-日暮里が開通した際に開業。

1906 (明治39) 日本鉄道の国有化に伴い、国有となる。

1928 (昭和3) 頃 現在地より北寄りにあった駅を現在地に移転。

1931 (昭和6) 京成電気軌道 (現 京成電鉄) の日暮里駅が開業。

2008 (平成20) 日暮里・舎人ライナー開通。東京都交通局の日暮里駅が開業。

2009 (平成21) エキュート日暮里オープン。京成線下り線高架化、1Fが上り線ホーム、3Fが下り線ホームとなる。

## 【町名など】

**千駄木**（文京区） 古くは駒込村の一部で、名称の由来としては、雑木林で薪などを伐採してその数が千駄にも及んだからという説や、室町時代の武将、太田道灌がセンダン（梅檀）の木を植えた地で、この梅檀木が転訛したとの説がある。また柳田國男は『母の手毬歌』の中で、雨乞いの儀式「千駄焚き」（センダキと発音する地域が多い）と関連付けている。

**根津**（文京区） 地形由来説と神社由来説があるが、『本郷区史』では、地形由来説をもっとも妥当なものとしている。地形由来説では、この地域が古くは忍が岡、向ヶ岡と海との付け根の位置で、また船着場だったことから港の意味を持つ「津」とあわせた地名になったといわれている。一方の神社由来説では、もともと駒込千駄木の団子坂上に位置していた根津神社が、1706（宝永3）に現在地に遷座され、以降この一帯が根津と呼ばれたとされる。この「根津」の由来にも諸説があり、「不寝（ねず）権現」（寝ずに神々の番をする神）、「鼠（ねず）」（祭神の一つである大国主の神使）から来ているとも、ヤマトタケルが根津神社を創建した際に「ここは国の根、国の津たり」と語ったからともされる。

**弥生**（文京区） 水戸の徳川斉昭が1828（文政11）年3月（弥生）にこのあたりの景色を詠んだ歌碑（向ヶ岡碑）を、水戸藩中屋敷（現東京大学本郷キャンパス・浅野地区）内に建てたことから。同地区は1884（明治17）に向ヶ岡貝塚で弥生式土器が発掘された地であり、弥生式土器と弥生時代という名称はこの地に由来する。

**谷中**（台東区） 谷中の名は上野台地と本郷台地の谷間に位置することからといわれる。江戸時代、上野に寛永寺が建てられたことから隣接した谷中にもその子院が多く建てられた。また、幕府の政策により慶安年間（1648～51）に神田付近から多くの寺院が移転し、また、明暦の大火（1657・明暦3）の後にも寺院が移転してきたため、現在も100近くの寺院が集積している。

**日暮里**（荒川区） かつては新堀（にいほり）という地名で、室町時代頃には既にそう呼ばれていたという。この新堀は、新しく造られた村・町の意味と考えられている。新堀村は1878（明治11）に日暮里村に改称されるまで存続していた村名。一方で、享保の頃から「一日中過ごしても飽きない里」という意味を重ねて「日暮里（日暮らしの里）」の字が当てられ、名所絵等でも日暮里と記されることが多かった。1966（昭和41）に住居表示の施行により東日暮里と西日暮里に分けられた。なお、Wikiには1749（寛延2）に正式な地名となったと記されているが、村名は明治初期まで新堀であり、どのような「正式な地名」なのかは不明。

## 参考文献・参考サイト

- 『今昔東京の坂』岡崎清記、日本交通社出版事業局、1981 『江戸東京坂道事典』石川悌二、新人物往来社、1998  
 『カラー版 大人のための東京散歩案内』三浦展、洋泉社、2006 『東京の階段』松本泰生、日本文芸社、2007  
 『川の地図辞典—江戸・東京23区編』菅原健二、之潮、2007 『江戸・東京地形学散歩』松田磐余、之潮、2008  
 『凹凸を楽しむ 東京「スリバチ」地形散歩』皆川典久、洋泉社、2012  
 『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』松本泰生、洋泉社、2017 『東京23区凸凹地図』昭文社、2020  
 『文京区歴史的建造物（近代）悉皆調査報告書』文京区教育委員会・文京ふるさと歴史館、1999  
 『文京区史跡散歩』江幡潤、学生社、1992 『東京坂道散歩』富田均、東京新聞出版局、2006  
 国指定文化財等データベース <http://www.bunka.go.jp/bsys/>  
 猫の足あと—東京都・首都圏の寺社情報サイト <http://www.tesshow.jp/index.html>  
 東京23区の坂道 <http://www.tokyosaka.sakura.ne.jp/index.htm> 坂学会 <http://www.sakagakkai.org/>  
 東京の階段 DB <http://blog.goo.ne.jp/tokyostair/> 都市徘徊Blog <http://blog.goo.ne.jp/asabata/>

**裏通りの漆喰戸袋家屋** 外壁が塗り直され、模様が黒く彩色された。

**高田爬虫類研究所** 2014解体 ヘビ博士として知られた高田榮一（1925～2009）の自宅・研究所。1960年頃、研究のため根津の自宅に「高田爬虫類研究所」（爬虫類友の会／高田動物生態研究所）を創設。日本人専門家として初のコモド島調査を行い、コモドオオトカゲの紹介などをした。同氏は作家の椎名誠が若い頃に働いていた「ストアーズ社」の専務で、椎名の自伝小説『新橋烏森口青春篇』には、いつもポケットに蛇を入れている奇人「へび専務」として登場している。

**上海楼跡** 戦前期には東京で一、二を争う中華料理の宴会場で、文士の出入りも多い店だったというが、戦後に旅館業を始めたらしい。ピンク色に塗られた木造2階建てが印象的な旅館だったが、2005（平成17）に解体された。

**村山邸** 新坂わきの洋館 2014（平成26）解体

**大銀杏**（大名銀杏・大平銀杏） かつての大給邸の屋敷内にあったもので、鈴木三樹之助への邸宅売却時に大給近孝が残して欲しいと希望したもの。大平正芳は1966（昭和41）までここに住み、世田谷区瀬田への転居時に敷地を文京区に寄付し、千駄木第二児童遊園となった。。また2010年頃までは日暮里富士見坂からもよく見えていた。

**市嶋邸** 早大図書館の設立に貢献した「早稲田の四尊」故市嶋謙吉の遠戚にあたる市嶋宗家、故市嶋信氏の遺族から早大に寄付された住宅。横浜鶴見にあった市嶋本家の建物（明治期に建設）の一部を大正時代に千駄木へ移築したもので、築100年以上、移築後でも80年以上経っていた。老朽化のため2020年に解体。一部部材等は新潟県新発田市の市嶋家に寄贈された。